

クラシックは面白い — その10

ESSAY
エッセイ

ピアノのお話Ⅲ

ピアノがその前身であるチェンバロやクラヴィコルドという楽器とどこが違うのかといえば、この楽器の発明者とされるクリストフォーリの作った楽器が何と呼ばれたかを見ればわかってしまうのです。それらは cembalo che fa il piano e il forte (弱音も強音も出せるチェンバロ) と呼ばれました。それは同時にこうした楽器の誕生を心待ちにしていた人たちの夢をのせた命名です。つまり「これまでのチェンバロも良いけれど、大きい音と小さい音とが使い分けられたらもっと良いのに」と誰もが思っていた、その願いを叶えるように誕生した楽器というわけです。

従来の、強弱にあまり差のない楽器を強弱のはっきりした楽器にするためにクリストフォーリはどのような試みをしたのか？

それは——画期的なことですが——ハンマーを発明したことです。ハンマーとは金槌とか木槌とか呼ばれ、釘などを叩いて打ちこむ道具ですね。つまり、それまでのチェンバロの類の楽器が弦を弾くとか引くとかといった動作で音を出したのに、クリストフォーリの新楽器は弦をハンマーで叩くということが根本的に違うのです。弦を弾いたりしているうちは指先の力でできる強弱の範囲に限界があるのですが、ハンマーで叩くことにすれば、もっと大きい音の出せる可能性

がある。
しかし、どうやってハンマーに弦を叩かせたら良いのだろう。いま、仮にドならドという鍵の先にハンマーを固定して、そのドの鍵を押してみます。ポコッと鈍い音がするだけで、ピアノのドを弾いたときのあの長く澄んだ音がしません。その理由は、鍵を押したときに、鍵の先にある固定ハンマーが弦にぶつかりはしますが、すぐに鍵から離れないために鈍い音になってしまうのです。そうです 実験してみてください。お箸でグラスを叩いてチーンといい音がするためには、打った瞬間にお箸がグラスから離れないといけません。お箸がグラスにくっついたままですとブスッと鈍い音がするだけです。そうなんです。すべて、「叩いて音を出す」ためには、叩いた方が、叩かれた方からすぐに離れないと音が出ないんですね。ではピアノの先につけたハンマーが、どうやれば、弦を叩いてからすぐに弦を離れるのでしょうか。

そこがクリストフォーリの天才的な発明です。(つづく)

執筆／石井宏（音楽評論家）

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

ぎふ秋の音楽祭 2017
“鍵盤の日”

LIFE ~人生に似たピアノ

横山幸雄 10時間 ショパン連続演奏

2017. 11/18 (土)

11:00 開演 (10:30 開場) 20:45 終演

チケット料金
全席指定
S席 5,000円
A席 4,000円
学生半額 (30歳まで)
※サラマンカメイトは割引
※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット
発売中



©アールアンフィニ

《Program》
ショパン：英雄ポロネーズ ほか
全 84 曲 (6 部構成)

Piano Party

ピアノパーティ
庄巻、ピアノ4台 絶妙、ピアニスト4人

2017.
11/19 (日)
16:00 開演 (15:30 開場)

チケット料金
全席指定 S席 4,000円
A席 2,000円
学生半額 (30歳まで) ※サラマンカメイトは割引
※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット
発売中



近藤嘉宏



宮谷理香



菊地裕介



松本和将

《Program》ベートーヴェン/キルヒナー：交響曲第5番「運命」(4台8手)ほか